

「水の循環」という言葉は、きっと皆さんも知っている、有名なものだと思う。

この「水の循環」の流れの最初に、「山に雨が降る」というものがある。

山に雨が降ると、その水は川に流れる。それが一気に行われるのであれば、川の水かさは増し、洪水が起きてしまうかもしれない。でも、雨が降るたびに洪水が起きることはない。それはなぜなのだろう。

その理由の一つに、「緑のダム」の働きがある。小学生の時、理科の時間に習ったことを思い出してみると、「緑のダム」というのは、水を貯めたり放流したりできる、ダムのような働きをする森林のことだ。

ダムは、大雨が降った時に川の水量を調節するのに役立つが、人工のダムの場合、ダムを建設することによって環境を破壊してしまうことがある。それに対して「緑のダム」は、森林に生えている木がもともと持っている、水を蓄える働きで川の水量が増え過ぎるのを抑えてくれるので、人工のダムよりも能力は劣るが、環境を壊すことがない、まさに「天然のダム」だ。

そんな「緑のダム」は、まず、木がないとその力は発揮されない。木がないと「緑のダム」の働きができない。つまり、水を蓄えることができないのだ。人工のダムがある所なら、水が0になることはないと思うが、面積の小さい「島」ならどうだろうか。実際に、昔、森林がなくなって水不足になってしまった島がある。

それは「天売島」だ。

「天売島」は、私が住んでいる、北海道留萌管内の沖合に浮かぶ、人と海鳥が共生している貴重な島だ。かつて、島の森の多くが消滅してしまった時期があると知って驚いた。今の島には木がたくさん生えているからだ。

調べてみると、ニシン漁が盛んだった時代に、肥料として出荷する「ニシン粕」をつくるために薪が必要だったため、森林の伐採が進んでしまったらしい。すると、森林が少なくなって「ハゲ山」が目立つようになってしまった。そればかりか、水を蓄える「緑のダム」の役割を担う木がなくなっただけで、島が水不足になってしまった。自分たちが生きていくために木をたくさん切ったら、今度は、生きていくために必要な水がなくなってしまった。木もなく、水も十分にならない、まるで砂漠のような状態になってしまったのだ。

困った人々は、一生懸命に木を植え、島の厳しい自然環境に負けないで木を増やして、水不足を解消したが、それには何十年もの長い年月がかかった。(参考…ミツカン 水の文化センター ホームページ)

この、天売島での出来事でわかることは、「水と森は密接に関わっている」ということ。雨が降らないと森林は育たないし、森林がないと水が十分に手に入らない。つまり、水と森林は、切っても切れない関係なのだ。この、自然にとって大切な関係を保っていくためには、自然から水を分けてもらっている私たち人間が、森林を手入れし、水を使いすぎないように心がけることが大切だと思う。それに加えて、醤油などの調味料や洗剤を直接排水口に流さないことも大事だ。例えば、天ぷらに使われる油。それを大きじ一杯そのまま捨てたとして、油をうすめて処理するには、お風呂の浴そう二・五杯分、四千五百リットルもの水が必要になる。油をうすめる分の水も無駄になっってしまうし、そのまま川に流れると、自然や生き物に悪影響を与えてしまう。だからこそ、私たちが、洗う物のときに洗剤を使いすぎないように気をつけたり、油のついた食器を洗う前に油を拭き取っておくことで、水にも自然にも負荷をかけないようにしたい。

皆さんにも、ぜひ森林の働きを理解してもらい、水も森林も大切にしたいと思う。